



監督＝ヴォルフガング・ベッカー／出演＝ダニエル・ブリュール／カトリーヌ・ザース／チュルパン・ハマートヴァ／マリヤ・シモン（ギャガ・コミュニケーションズ、Gシネマグループ配給／2003年ドイツ映画／121分）

1989年11月9日は「東西冷戦」の象徴だった「ベルリンの壁」が崩壊した歴史的な日。しかし、そんなコトが、やっと意識が回復した母親にバレたら、東ドイツの崇拝者であった母親はショック死……？ そこで息子が考えた提案は、何と、すべてを「あの日」に戻すこと！ 果たしてそんなことが可能なのか……？ まるでマンガみたいな虚構の世界だが、あの名作『ライフ・イズ・ビューティフル』と同じように、「善意の嘘」の大切さがジーンと胸にしみてくる。そしてそれがいつの間にかホンモノ（？）に……？

🎬 ベルリンの壁崩壊の一大ドラマ

1960年代の東西冷戦の象徴は、1961年以降ドイツを東西に隔ててつくられたベルリンの壁。このベルリンの壁が崩壊したのが今から15年前の1989年11月9日だ。1985年、ソ連に登場したゴルバチョフ書記長が、翌1986年から始めた「ペレストロイカ」の推進が、東西冷戦の終結に向けてのスタート。その後この「民主化」の動きは雪崩のように広がった。

東ドイツの社会主義統一党のホーネッカー書記長は1989年10月6日、東ドイツの建国40周年を祝うスピーチを行い、翌7日には記念式典を行なったが、東ドイツではその日に改革を求める大規模なデモが発生した。そしてその後わずか1カ月の間に一気にベルリンの壁の崩壊まで進んでいくことになった。

東西冷戦やベルリンの壁を扱った映画の名作は多いが、ベルリンの壁崩壊とい

う歴史上の重大事件を、ユーモアをまじえながら人間味タップリかつドラマティックに描いた映画は、この作品をおいて他にないだろう。

主人公の父と母は？

宇宙飛行士を夢みる主人公アレックス（ダニエル・ブリュール）は、姉アリアネ（マリア・シモン）とともに育ち、今は東ベルリンのテレビ修理店に勤めている。父は10年前に家族を捨てて西側に亡命したと聞かされてきたが……？ その反動からか、母クリスティアーネ（カトリーン・ザース）は「社会主義」と「再婚」した。そしてセックスがない分、その活動にのめり込み、今や国家から表彰されるほどの活動家に……。

そんな母親クリスティアーネが、東ドイツ建国40周年を祝う式典の日の、改革を求めるデモで息子アレックスが警察官に連行されるのを見たのだから、そのショックの大きさはわかるとうもの。あまりのショックにクリスティアーネは心臓発作をおこし、意識不明となり、昏睡状態に。しかし、こんな植物人間状態のクリスティアーネを懸命に看病したアレックスの願いが通じたのか、その8カ月後の1990年6月、クリスティアーネは奇跡的に意識を回復した。

激動の8カ月

アレックスがデモで捕まったのが1989年10月7日。そしてクリスティアーネの意識が回復したのは翌年の6月。この8カ月という期間は、東西ドイツにとって激動の8カ月であったし、「社会主義の敗北」を結論づけたものだった。東ドイツの首都であったベルリンにも今やモノや車があふれ、ロック音楽が流れ、コココーラの看板が立っていた。

しかし社会主義の国・東ドイツの信奉者であり、その熱心な活動家であった母クリスティアーネがそんなことを知ったら、大ショックを受けることはまちがいない。そして、やっと意識を回復したクリスティアーネが再び大きなショックを受ければ、とりかえしのつかないことになる。アレックスは主治医から厳重に注意されていた。

しかし、こんなに激動している世の中の動きをクリスティアーネに隠すことな

どできるはずがない。さてどうすれば……？　そこでアレックスがとった作戦は……？

マンガみたいな作戦の敢行！

病院は完全看護制だが、必然的に流れてくるニュースを見れば、もはや東ドイツは「死に体」だという現実には母親はショック死してしまうだろう。ここは、母親を自宅に引きとって、世の中は8カ月前と何も変わっていないとウソをつき通すしかない。それがアレックスの考えた作戦だ。

もちろん8カ月の内に子供たちの状況は変わった。姉のエリアネは結婚して子供も生まれているし、アレックス自身もデモの時知り合った可愛い女の子（チュルパン・ハマートヴァ）が偶然病院の看護婦をしていたため、今や恋人同士となっている。このような変化を母親に見せるのはいいけれども、社会の変化を見せるのはダメ。果たしてそんなことが可能なか……？

あの感動作『ライフ・イズ・ビューティフル』（98年）で、ユダヤ人収容所に収容された父親が息子についたウソは、「隠れているのはゲームだ。1000点集めたら戦車がもらえるから」というもの。このウソによって、死と隣合わせの収容所での苦しい生活を楽しい点数獲得のゲームにしてしまったわけだ。

それと同じように、この映画でアレックスがクリスティアーネについたウソは、東ドイツが健在であり、今でも国家的威容を誇っているということ。しかしこれはちょっと難しい……。部屋を模様替えして、昔のベッドや家具、カーテン等をそろえたり、交代で誰かがずっと付き添って話を合わせるだけならいいのだが……。母親の大好物だったピクルスも、今ではその入手は至難のワザ。世の中がドンドンと消費社会に向けて加速していく中、アレックスだけは1人、東ドイツ時代の骨董品あさりの毎日となったが……？

ウソつきテクニックは次第に巧妙に……

ベッドで寝ているだけのクリスティアーネはテレビを欲しがった。いつも息子や娘に付き添ってもらわなくても、テレビを置いてくれれば1人で大丈夫、という当然の申し出。しかしテレビは最悪。なぜならテレビは、当然今のニュースを

報じるから……。

そこでアレックスが考えたのは、友人と組み、ビデオを活用してのインチキニュース(?)の製作。現実問題としてはそんなことはとても無理だと思うものの、映画の中で現実に(?)やられてみると、これが見事な出来ばえ……。この高級テクニック(?)は、回復したクリスティアーネが1人で自宅から街へ出た時に見た一変した風景の説明にも役立った。

西側から東ベルリンへの相次ぐ人々の流入の様子やその流民たちの受け入れ協力の要請など、インチキアナウンサー(?)によるインチキ報道(?)と現実の事実とをうまく組み合わせれば、いとも簡単に「立派に存続しているドイツ連邦共和国」という虚構の世界をつくり出すことができるわけだ。

東ドイツによる統一(?)を見て母親は……

歴史的事実としては、1990年10月3日、東ドイツは西ドイツに統合された。そして東ドイツは「加入地域」とされ、ベルリンの旧帝国議会場前で式典が行われた。ところがアレックスたちは、この歴史上の大事件さえも見事にクリスティアーネにウソをついた。つまり西側が東側に統一され、西側の国民たちは資本主義の反省の上に次々と社会主義国の東ドイツに流入し、東ドイツはこれを悠然と受け入れているというニュースをデッチあげたのだ。

アレックスが、東ドイツの社会主義統一党の書記長を退いたホーネッカーの後、新しい統一ドイツの指導者として登場させたのは、かつての東ドイツの英雄であった宇宙飛行士のジークムント・イエーン。こんな途方もないデッチあげ(?)まで、うまく(?)インチキニュースをつくることによってやりとげたのだ。そしてそれを見て、クリスティアーネは息を引きとったが、彼女はその際、わが祖国、ドイツ連邦共和国に対して大きな誇りをもつことができたはずだ。たとえそれが、東西全く逆の大ウソであったとしても……。

構想のすばらしさとタイトルのすばらしさに脱帽

母親を思って懸命にウソをつき続けるアレックスの名演技もさることながら、この映画が何よりもすばらしいのはその構想。ベルリンの壁崩壊という重大な歴

史上の事実を、母を思う息子の愛という物語の中に入れこみ、歴史上の事実をすべて逆に説明、納得させていくという構想にはただ感心するばかり。

2004年アカデミー賞最優秀外国語映画賞（ドイツ代表作品）を受賞した他、2003年のベルリン国際映画祭最優秀ヨーロッパ映画賞の受賞やドイツ・アカデミー賞9部門を受賞したのも当然、とうなずくことができる。そしてすばらしくセンスがいいのは、『GOOD BYE LENIN！（グッバイ、レーニン！）』というタイトル。まさにこの映画にピッタリだ。さらにまた、1人街へ出たクリスティアーネの目の前を、半分こわれたレーニン像をつったヘリコプターが飛んでいくシーンは、実にうまく「社会主義よ、サヨウナラ」という感じを表現している！

🍀『グッバイ、レーニン！』の次は……？

2003年のイラク戦争によってフセイン政権は崩壊し、「グッバイ、フセイン」が実現した。しかしイラク国内の混乱は容易に正常化されず、泥沼化の様相を呈している。お隣の韓国では2004年3月12日盧武鉉大統領の弾劾決議の後実施された、4月15日の総選挙でウリ党が大躍進し、再び、「太陽政策」の進展がささやかれている。また2002年9月17日の日朝「平壤宣言」から既に1年7カ月以上が経ったが、「拉致問題」は依然として進展を見せていない。

そんな中、日本では来たる7月に参議院議員選挙が実施されるが、白日の下にさらされた「未納3兄弟」をはじめとする閣僚たちの年金保険料不払い問題などによる日本国民の「政治離れ」は、さらに加速している。しかしそれでよいのだろうか？

ベトナムの南北統一は、悲惨な長期間にわたる戦争という犠牲の上に実現したことを考えればわかるように、この映画で描かれた東西ドイツの平和的統一はきわめて珍しい例外的な出来事であり、まさに人類の英知の結集によって実現したものだ。私たちが『グッバイ、レーニン！』の次に目指すべき『グッバイ、〇〇！』とは……？ それは、日本国民が1人1人真面目に勉強し考えれば、当然わかるはずだが……。

2004（平成16）年5月6日記